

カーニバルは続く、Lydia Molyneaux

「1736年のポルテウス暴動 (proteus riots) 以来最悪の路上の混乱」とスコットランドのマス・メディアは「完全な楽しみのためのカーニバル (*Carnival of full enjoyment*)」について吹聴しました。18世紀スコットランドの歴史の知識が多くない人のために説明すると、これは群集がある密輸業者に対する死刑執行に反対して暴動を起こし、最後には死刑執行を決めた役人の首をつった出来事をさします。

2005年の7月4日には役人は、首をつられることはありませんでした。しかし、出来事は別の形でその足跡を残す別ことがあります。私たちは確かにパーティをする権利だけでなく、それ以上の何かのために戦っていました。しかし、それをどれくらい目にすることができたでしょう。反G8の動きに参加した他の人々のように、私たちは一時的な見世物以上のものを目標にしていました。私たちはどこで生きていても、働いていても継続する抵抗に活気を与えるような新しい種類の行動を模索していました。

地元の人のための地元の行動

イタリアやスペインでの最近の活動に刺激されて、私たちは労働と生活のさらなる不安定な条件、つまり低賃金や、雇用されているものへの圧力とストレス、失業者への強制労働などへの抵抗を表現したかったのです。労働の組織、管理、搾取は資本主義にとって中心的で、私たちは賃金奴隷、給付金奴隷、借金奴隷、そして軍事奴隷に反対するために街頭に出ると同時に、その基盤を転覆することを目的としました。私たちは「完全雇用」に対抗して「完全な楽しみ」という横断幕を掲げました。

大きなデモの後、人々はよく「もう見世物の集団行動は忘れよう、地域の共同体で組織をするべきだ」ということを口にします。私たちの多くは何年も地域ベースで活動してきたし、これからもそれを続けます。しかし、ここにきて聞いてみる必要があります；私たちの地元の「共同体」は何で構成されているのでしょうか？共同体は、労働のようにますます移ろいやすく、いままでの地域活動の方法は他の領域で飽きられてしまったような方法と同じくらい限られてしまう可能性があります。そうです、大勢で長い距離を歩き回って、警察に囲われるのは憂うつになることもあり、私たちの日々の生活を少しもよくはしてくれません。しかし地域主義そのものが人

をがっかりさせたり、無力にさせることがあります。隙間風の入るホールでの借家人の集まりで、会長が役人から聞いた話をだらだらしゃべり続けるのを聞いたり、雨の日に職安の前で2人の友達と一匹の犬と一緒にビラを配ったりしたことのある人に聞いてみるといいでしょう。カーニバルを組織することで、私たちは地域/職場の闘争と大衆行動との間のギャップを乗り越えるための一歩を踏むことを希望しています。

楽しみゾーン

いくつかのインスピレーションは2000年のブリストルでの「雇用ゾーン」の導入に反対する行動からも生まれました。「雇用ゾーン」とは、地元の無収入の人々が時間の無駄である「試験的」な仕組みの実験台となり、絶望的な労働力を作り出す社会運営の方法です。ブリストル・ベネフィット・アクション・グループ（BBAG）によると、活動家たちが難民に対する給付金を受給できる権利を取り上げ、ニューディールを拡張し、社会保障費を切り捨てる「雇用ゾーン」の導入に抗議し、そして楽しい時を過ごすために地元の労働党事務所を「楽しみゾーン」に変えたという。その占拠/パーティは1時間半続いた。BBAGはその後職安でビラを配り、他の社会保障受

給者やそのグループをその人たちの地元でも「楽しみゾーン」を作るように誘った。

私たちは G8 サミットの始まりをしるすためにこれをより大きな規模で行おうと決めた。リーダーたちが世界の人口をどうやって搾取しようかと議論するために集まる時に、移動式のパーティで私たちを貧困、過労、そして借金に追い込む機関を「訪れる」ことにしたのです。ターゲットはニューディールやワークフェアを進める組織、職業紹介所、保安官事務所（管財人）、最低な雇い主、軍人採用事務所などを含みました。私たちの多くは既に社会保障受給者と債務者の抵抗運動に参加していました、そしてこれをその闘争を周辺化され、追い詰められた地域主義から活力のある抵抗運動へと引き上げるチャンスだと思いました。私たちは反戦の立場と地元の「経済的な徴兵制」（無職の若者が軍隊へ入るようにプレッシャーを与えられること）に反対するキャンペーンを繋げたいと思いました。

私たちはこのことをいくつかの反 G8 プロパガンダに見られる道徳主義から離れることであると考えました。たとえば、G8 気候行動（G8 Climate Action）のウェブサイトにある初期の声明は、「私たちに他何百万ものもっと抑圧された人々のために行動する世

界的な責任とユニークな機会があります」と提言します。率直に言
って、これはあまりにもボブ・ゲルドフ¹の恩着せがましい態度の直
接行動バージョンに聞こえてしまいます。私たちはG8に抵抗するこ
とを、私たちのビラの文面にあるように、「雇い主や政治家に対する
日々の戦いをここエジンバラで世界中の労働者階級の人々の戦いと
繋げる機会」だと思いました。私たちが社会保障の切捨て、私有化、
強制的な労働政策を世界規模の資源や生きる手段の囲い込みとして
アプローチするなら、私たちは「世界的な南 (global south)」のよ
りどころのない人々の戦いと私たち自身の解放を繋げる具体的な基
盤があることとなります。結局のところ、あなたのドアに立つ管財
人（役所からくる公共住宅の家賃収集者）は他のところの共有地か
ら農民を追い出す企業連合の従兄弟とそう遠くないのです。

そして、私たちは J18（ジェイエイティーン）へ戻ろうとして
いたわけではありません。1999年のロンドンで、ドイツのケルンで

¹ロバート・フレデリック・ゼノン・ゲルドフ KBE (Bob Geldof、本名 : Robert Frederick Xenon Geldof KBE, 1951年10月5日 -) ナイト勲爵士はアイルランドのミュージシャン、作曲家、俳優、政治活動家。ブームタウン・ラッツのボーカリスト。(Wiki ペディアより <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9C%E3%83%96%E3%83%BB%E3%82%B2%E3%83%AB%E3%83%89%E3%83%95>)

様々なチャリティー活動を行っていて、2005年 G8 サミットの際には、Live8 コンサートを開催した。

開かれた G8 を印して 行われた「資本に反対するカーニバル

(Carnival against Capitalism²)」は大きな転換期であり、私たちの多くにとって思い出深いものです。しかし、J18 は金融資本に大きく焦点をあてていました。はじまりとしてはいい点だったといえます。しかし6年後の現在は、資本の**関係性** をどう攻撃し転覆することができるかを考えるところに来ているのです。

エジンバラの最大手の雇用主であるスタンダード・ライフ³への私たちの関心は、金融資本における役割に限られたものではありませんでした。それは手当での否認やすべての労働者に対する圧力による期限付き従業員の搾取とも関係していました。私たちのうちの何人かはそこで働いたことのある人を知っているか、似たような会社で働いた人を知っていました。このカーニバルが職員を攻撃しようとしたというメディアの嘘への応答として、私たちはスタンダード・ライフで労働条件を扱ったちらしを配った。私たちは職員 たちにカーニバルに参加し、「長めの昼食休憩をとり、できたら一日病欠して

²この行動へとつながるイギリス運動の潮流がいくつかあります。

まず、1983 から 84 年にかけて「シティを止めろ！ (Stop the City!) 」と呼ばれる数々の金融街の路上を同時多発的に一日中封鎖するという方法で、戦争や他の問題を作り出す軍事と金融の関係に反対する抗議行動が行われました。また、自動車を主要な交通手段とすること、グローバリゼーションに反対し、一時的に公共の場所を占有するリクレイム・ザ・ストリート。このよう運動の流れに触発され、「我々の抵抗は資本と同じくらい多国籍だ (Our Resistance is as Transnational as Capital) 」をスローガンとして

³ 生命保険会社。国内に 8500 人、国外に 12,000 人の雇用主を抱える。

恨みを晴らしましょう」と招待しました。私たちは前向きな反応を
えて、最後にはたくさんの労働者丸1日休みをとったのです！

おまわりと警戒線

私たちの前にはたくさんの警官がくるだろうとわかっていました。
広く知らされた集合場所とともに、私たちは非公式の集合場所を用
意することで人々は一点に集まって警察がつくるどんな警戒線も通
り抜けることができるというつもりでいました。運が悪いことに、
この計画があつたにもかかわらず、多くの人々が囲まれてしまいました。
何かしらの基礎的なよく組織された詰め物を使った方法⁴を使用
すれば抜け出せそうな警察の列の後ろに留まらせられるのはイライ
ラします。他の状況でもそうだったように、アフィニティ・グルー
プ⁵間のよりよい連絡があればもっとたくさんの人が必要な時に駆け
つけることができたでしょう。

それでも、警察は移動する群衆がプリンス通りをグループを造っ
ては解散すると言った様子でグルグル回るので、このエリアを完全

⁴ 詰め物を使った方法 (Padded tactics) とは、固めのクッションのようなものを盾代わり
りに使い警察の防衛線を突破する方法。

⁵ アフィニティ・グループ(英語表記: **affinity group**)とは、[直接行動](#)で共に行動する少数の
活動家(通常3人から20人ほど)の小さな集団。(ウィキペディアより)

参考: [「ハイリゲンダムG8対抗イベントに参加して」](#) A-TTAK メンバーへのインタビュー
<http://www.jrcl.net/web/frame07079d.html>

にコントロールすることはできませんでした。この日一番の感激すべき出来事は活動家ではない「地元人」が参加したことでした。これは疲れ果てて居酒屋で休憩するアナキストと同じ数だけの「キッズ（若いの）」が後から街頭へでてくるというよく見られる「第2シフト（遅番）」と呼ばれる現象を超えるものでした。世代を超えた人々が午後からプリンス・ストリートに集合しました。後に、警察に対する地元の怒りが一番直接的な抵抗を刺激したのです。

多くの活動家たちは月曜の逮捕は後の阻止行動に影響することを心配していました。何人かはカーニバルが警察の注意をそらすためのものだと言いました。そこで起こったことはその人たちが間違っていることを証明しました。後にスターリング在住の参加者が書いたように、「完全な楽しみのためのカーニバル」はその週に起こることになった大成功した阻止行動への意気込みを見せ付けました。人々が羊のように囲われることを拒否する姿は、国家がこれから(G8 抗議行動の中で) 起こることすべてを思いどおりにはできないということを良く暗示した。なによりもひょっとしたら、カーニバルは少しの連帯を固めたといえるし、それ自体がいつでも感激すべきことである。」

水曜日の阻止行動のために今逮捕されるわけにいかないということをおぼえながら、多くの活動家は4時から5時までの間に安全な場所へ向かった。同じ頃、「地元の人」はローズ・ストリート周辺で再び行動を始めた。皮肉なことに多くのエジンバラの人々は「ビッグな日」に向けて自分たちの力を蓄えておこうなんていうことを考えていなかった。月曜日のカーニバルは「彼ら/彼女ら」の日であり、みんなそれを実行したのだ！もしかしたらこのことはあまりにも「目玉 (Big One)」というクライマックスを強調しすぎたことを表しているかもしれない。国家管理と資本（そして結果的に G8 の機能）への妨害が、期待していなかった時間と場所で起きるかもしれないという時に。

しかしこのカーニバルは良く見積もっても、路上を管理する警察に対する防衛的な闘争でしかなかったのだろうか？それは見栄えが良く素晴らしい瞬間もあったけど、なにか新しいものが生まれたのだろうか。ある者たちは、本当の政治性は混乱の中で失われたと感じた。アイルランドのインディメディアに投稿した者が言うように、「テーマを明白に表した主催者たちの横断幕がいくつかあったけれど、それらは警察に包囲されている間に失われた。」

結局は、わたしたちが政治的な「ターゲット」を「訪問」することができなかつたのです。福祉手当事務所の大きな窓にはスコットランドの失業手当スパイ⁶のチーフの名前の電話番号が書かれたビラが張られていましたが、すぐに剥がされてしまいました。2箇所の保安官事務所も攻撃されたことも聞いていますが、これが本当なら、ガラス屋はあまりに仕事が速く、私たちは確かめることができなかつたということになります。カーニバルのこの側面が成功していたなら、エジンバラやその他の場所で失業手当スパイやニューディールの政治局員や保安官事務所は公衆の強い嫌悪感や抵抗を受けていただろう。最も重要なのは、みんなで行動すればこういう人たちを恐れる必要はないというメッセージが広がっただろうということだ。

将来的には、私たちは囲われることを防ぐためにアフィニティ・グループ間のネットワークをもっとよくすること、あるいは数の多いグループが捕まった時には重要な場所を訪れることなどを考えることができます。実は、このような予備的な計画は議論されてきました。ただ当日は十分に効果を発揮するために必要な連絡を取り合うには遅すぎました。

⁶ Dole Snooper おそらく失業手当受給者が受給中にバイト等をしてないかと詮索し、通報する仕事をしている人のこと。

宣伝ももっと広くなされるべきでした。一般参加者とアフィニティ・グループの行動のバランスや調整も他の行動について鍵を握るものだったと私は考えています。

これらの多くの議論は7月3日の反権威主義集会 (Anti-authoritarian Assembly) で話されるべきでした。この集会是元々その週に行われるアナキストや反権威主義者による様々な行動を調整するために設けられました。

しかし実際は水曜日の阻止行動以外に何も話をする時間は残っていませんでした。これは後で触れる組織の仕方に関する問題に関わってきます。

長く、つらく、くたくたに疲れる

簡単に言って上記の問題は、あまりに多くのことを最後に片付けてしまおうとする焦りに原因があったと言えます。しかしどうしてそうなってしまったのでしょうか。2004年の10月には行動について集まって考え始めていたのに。回想すると、それは早期の間違いにたどり着きます。私たちはディセント！ (Dissent!) はディセントの集会を連絡や組織をする場として頼りすぎていました。同じように ESF (ヨーロッパ社会フォーラム) イベント (10月) やア

ナキスト・ブックフェア（11月）等もそうです。その時は、様々な場所から人々が集まるイベントで集会をするのが理にかなっているように思えたのです。しかし「ディセント！」の集会はしばしば長く、つらく、くたくたに疲れるものでした。多くの後半の集会は基礎構造的なことへささげられ、行動について決める時間やエネルギーがなくなっていました。これらの集会はもしかすると荷馬車を馬より優先してしまったのかもしれませんが。先に行動について決めて、その行動を可能にするために必要な構造をあとから決めることができなかつたのでしょうか？

「ディセント！」はそれじたい行動を組まないネットワークであったことが行動について全く関知しないことへの言い訳であったように見えます。私たちの多くは初めのディセント！のその役割について、多様性、安全性、そして暴力に関する議論を避けるために承知していました。しかしディセント！の集会は行動の調整する場としても意図されていたはずなのに、それはどこへ行ってしまったのでしょうか？

ニューカッスルで行われた集会（2004年12月）では、私たちは暫定的な行動のタイムテーブルを作りながら有益な午後を過ごしまし

た。しかしもっと典型的な集会の形はたとえば2005年2月のグラスゴーで行われた集会で、その時は行動を計画するグループが集まって話し合うって、全体に報告するのに15分しか残されていませんでした。私たちが自分たちでカーニバル行動のための会議をエジンバラで開催した時にはじめて具体的で創造的な計画が出てきたのです。最初のエジンバラでの公開ミーティングは5月に行われました。このプロセスが2月、いや3月にでもはじめることができたら何ができたか想像してみてください。さらに、ディセント！の集会に一度もいったことがないような人たちが5月や6月の会議に来てくれました。ですから、連絡を取り合う場としてあまりディセント！に集中せずに、私たちはエジンバラで定期的な会議を持ち、もっと地元の人たちを巻き込むことができたはずです。国外からG8抗議行動に参加しに来た人たちの多くはカーニバル行動がなんなのかよくわかっていなかったということを聞きました。国際的な宣伝ももっと良くできたはずです。私たちは不安定雇用 / 生活問題 (Precarity) に取り組むユーロメーデーのようなネットワークにも関わろうとしました。ただそこにはサミット抗議行動は過去のものという雰囲気が強くありました。G8抗議行動の国際会議などでもプ

レゼンテーションを行いました。明らかに私たちは他のもっと自明でない形の国際ネットワークについて考える必要があるでしょう。しかしながら、たくさんの世界中から来た同志たちが最終的に7月3日の不安定雇用/生活についてのディスカッションに参加をしれたので、そこから連絡を取り合っていくことが可能です。

歯を抜くように困難なこと

1990年代の古き悪き日々 (bad old days) においては、イギリスの階級闘争アナキストと環境問題に取り組む直接行動者 (eco-direct-actionist) は全く別の惑星に住んでいるように見えました。しかし、90年代の後半になると、両方からの思い込みに挑戦するような出来事や行動を目にするようになり (たとえば J18 や リクレイム・ザ・ストリート⁷とリバプールの港湾労働者の協同の取り組み)、しばしば「反資本主義者 (anti-capitalist)」と呼ばれるネットワークへと結びつけられていきました。いくつかのディセン

⁷ **クレイム・ザ・ストリート (Reclaim the Streets)** は公共空間の利用法に関する運動を行っている市民団体。日本語における名称は未だ定まっておらず、『路上(道路)を奪還せよ』、『リクレイム・ザ・ストリート』なども用いられることがある。英語圏においてはしばしば **RTS** と略される。現代における主要な輸送機関である自動車の利用中止を求めており、一般的には反グローバリズム運動であると捉えられている。(ウィキペディアより)

ト！の会議の間、私はこれらのことが全く起こらなかったように感じました (*Days of Dissent!*⁸ が出版されたにも関わらず)。私は90年代にタイムワープしてしまったのでしょうか？「政治的な」議論が進む間、あたかも愚痴や嘆き声が後ろから聞こえてきそうな雰囲気がありました。

<http://w>階級闘争がG8抗議行動となんらかの関係があるかもしれないと検討するためにたくさんの（しかし**全て**のではない）人をディセント！に参加させようとするのは歯を抜くように困難なことでした。自分たち自身の生活や労働条件について闘争するのは自分勝手である、というのが典型的な見方だったようです。いいえ、我々は地球や可愛そうな人々を救うというような高貴な、他人の利益を考えることをやりたいと思っています！という感じで。ここでも再び、押し付けがましい慈善と連帯の間にある明確な違いについて混乱が起きているようです。反資本主義を、私たちを押さえつける者達と戦い、反逆したいという欲望ではなく、抽象的な道徳主義の問題であるととらえるアプローチに見られる症状でした。実際、いくつかのプロパガンダはあからさまに不快でした。たとえば気候変動を労働

⁸H 2005年の反G8行動の組織のために、これまで主の主なサミット抗議行動などの回想記や分析を参加者が書いたものを集めたパンフレット。

者階級の人々が休暇にスペインへ飛行機を使って旅行したり、季節外れのミカンをクリスマスディナーに食べたりすることに責任があるような表現をしたものなどがそうです。時には皮肉的なスローガンである「資本主義を廃止してもうちょっとナイスなもので置き換えよう」というのが現実とそう遠くないと思えることがあります。

アイルランドのインディメディアのコメント欄にあったように、私たちは「リクレイム・ザ・ストリーツのやり方をスペクタクルを超えて現実的な階級政治へ推し進めようとしていた」のです。これが気に入らなかった人もいました。しかし集会で私たちが計画について話すとき、この考えに反対する人も特にいませんでした。しばしば、行動やアイデアを発展させるためのいかなる現実的な政治的議論も封印するような鼻であしらうような沈黙に遭いました。

偉大なる大きな少量のチリ

政治性の問題や行動について議論することができないという現象は残念ながらディセント！の集会に限られたものではありませんでした。それは他のグループ（South East Assenbly [イングランド南東部の反G8行動に参加しようとする個人やグループの調整ネットワーク]、WONBLES [ロンドンの反権威主義グループ] など等）

にも見られましたが、その理由は別にあった可能性があります（一刻も早くパブへたどり着くため？）。何か提案があると人々はうなずくか何も言わないかのどちらかでした。ロンドン大学反権威主義グループから提案された7月7日のエジンバラでの行動についてもあまり検討されませんでした。この行動について考える機会の欠如が、ロンドンで行われたG8前の財政、雇用、そして環境省などの大臣会議への抗議行動の参加の数が振るわなかったことへつながったのかも知れません。同志達が特定の考えや提案が駄目だと思うなら、いいでしょう！ただそれが何故か聞いてみましょう、そして話をもっといい方法を見つけましょう。

私たちは6月になって初めて、ある人たちがカーニバル行動の計画は重要ではなく、私たちは全員みんなが承知の水曜日まで力を貯めておくべきだと思ったということ耳にしました。振り返ってみると、このことは阻止行動（ブロケード/blockade）のありうる姿への限られた見方を示していました。阻止行動は、どのように資本主義が機能して運営されているかというやり方を「阻止する」ことでもありえなかったのでしょうか？後になってわたしたちが目にしたように、月曜日の行動（カーニバル行動）は水曜日の行動への前向き

な波及効果が確かにありました。

勝算が不確定だったにも関わらず、スターリングとグリニーグルズの阻止行動は成功し、感激的でした。わたしたちのうち「ヒッピーどもが原野の真ん中に座ってるだけさ」という不平をもらしていた者はその言葉を口の中にしまわなくてはなりませんでした。大量で少量のチリ（訳注：??）と共に。しかし私はそれでも、後に残るインパクトを達成するために、行動は都市の中心部でも行われるべきだと思っています。都市での阻止行動やカーニバルのような都市でのアクションに関してためらいが多くの人にあったようです。スターリングに人的資源を集中させるために、都市の集会センター（convergence centre⁹）はある時点で閉鎖してしまうべきだという提案までなされました。

しかしながら、都市でのより強いアクションは他の阻止行動の混乱効果の度合いを増すことができたかもしれません。前もって取り組まれる計画や宣伝はもっと多くの人（雨の中キャンプはしないけど自分の街の路上なら活発になるというような人々など）を都市部の阻止行動に参加したかもしれません。なぜマスコミや警察はカ

⁹ サミット反対行動などの際に、行動参加予定の人が寝泊りしたり、情報収集したりなど、様々な目的のために設置される集合場所。

カーニバル行動についてそこまで大きく気をもむのでしょうか？わたしたちは敵のいんちきに惑わされたくないのですが、煙の後ろにある火を見ても役立つかもしれません。あいつらはカーニバルが資本と政府の大部分の機能の基盤となる都市部で起こり、そしてそこでは多くの人が集まることができるからという理由から心配をしたのです。昔のリクレイム・ザ・ストリートのスローガンにあったように、「ストリートでは権力が作られ、そして溶解する」

都市部での阻止行結末は私たちの多くを、じぶんたちの足をすべてひとつのバスケットに放り込んでしまわなくて良かった（力を一点に集中させなくてよかった）、という気にさせてくれました。事実上、カーニバル行動は数少ない大きい都市中心部での行動となりました。7月7日の行動もポテンシャルがありましたが。この行動は貧困地域に計画され高速道路設置に反対する闘争と地域共同体の抵抗との連帯を、真に反資本主義的な気候変動へのアプローチから繋げることを目指したものでした。

夜までにはなんとかなる

いくつかの問題の根本にあるのは「集会において、そうすれば夜までには全部なんとかなるから」という考えかたでした。しかし

ほとんどの成功した大きな行動（たとえばJ18）には丸1年かけた準備がありました。そのことは、その準備段階に参加していなくて、当日自分たちできめた方法で勝手に参加した人々を排除してはいませんでした。¹⁰この計画は基盤と骨組を与えて、あとは自立性や柔軟性、新しい決断をも促しました。

反G8行動に向けた組織化においては、たくさんの労力が基盤を固める方へ向けられましたが、行動の計画の発展は最後の数分まで残されてしまいました。ほぼ意図的にこうなったといえます。いくつかのアフィニティ・グループが自分たちの計画を入念に準備していた一方、全体像はどうでしょう？ネットワークというのは、概観と資源を全体にいきわたらせる手段を提供するべきではないでしょうか？例えば、わたしたちももっと多くの人々がエジンバラにいて、グラスゴー阻止行動の基盤の役割を担うようにすることもできたはずですが。前もって計画ができていないと、すべてが最後の最後で苦しく恐ろしい会議で、前日に車輪を発明し直すような作業をしなくてはならなくなります。その問題は反権威主義集会の限界も決定してしまっていました。

¹⁰ J18について。少数のひとびとが内密に計画をたてていたという性質がありながら、当日はかなりの数の参加者を得て成功。

乾いた走り

カーニバル行動もボギー・オン・ザ・ブリッジも目的を果たさなかったという中で、私たちはこれらを地域と職場の闘争を世界的な抵抗に繋げるための試みとして見るべきであるかもしれません。

2006年に向かって考えることは、セント・ピーターツバーグで行われるG8サミットはロシアや東ヨーロッパとの繋がりを強めるいい機会になるかもしれません。現在の東西ヨーロッパ間の資本と労働の移動を考えると、これは重要な要素です。最近のアイルランドのテスコで働くポーランドの非正規労働者との連帯行動で見られたように。ここ数年はロシアにおける年金や障がい者手当への制約条項への巨大な路上抗議行動を目にしてきました。そしてこのことはイギリスで私たちが直面する問題とも反響しています。

もちろん、私たちはボスや政治家のサミットにわたしたちの展望を縛られたくはありません。しかし、これらの出来事は特定の領域における闘争を浮き彫りにしたり、支援したりするきっかけを与えたり、さらに地域の抵抗を国際化する可能性があります。このアプローチは2007年のドイツで行われるG8サミットそしてその先にも使うことができるものです。

一方で、この文章の草稿を読んだ友人が言うには「あなたはあまりに否定的で自己批判的すぎる。カーニバルはすばらしい日だった。あの週の中で一番よかった。エジンバラの労働者階級の人たちははっきりとあの行動がなんのためだったかよくわかってたよ！」

本当のところは誰にもわかりません。ひょっとしたら彼女が正しいのかもしれない。

参考

スコットランド・インディメディア上にある当日の報告

<http://scotland.indymedia.org/index.php>